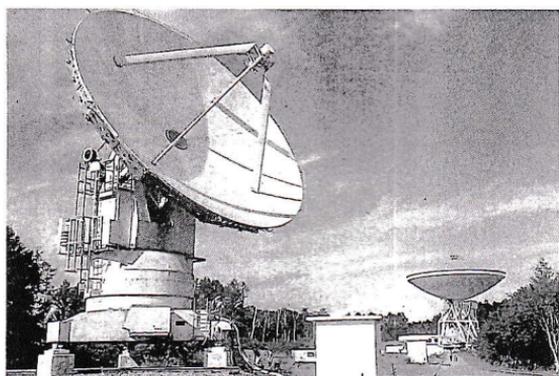




長野支局長
佐藤淳

輝き増す「野辺山」の遺産

いざさかくたびれたパラボラアンテナを眺めていると、懐かしささえ感じてしまつ。まるで



子供のころに熱中したテレビのアニメやヒーローものに描かれていた未来の光景のよう。過去に夢見た輝かしい「未来」が古びた姿でそこにある。

南牧村の国立天文台「野辺山宇宙電波観測所」を訪れた際、

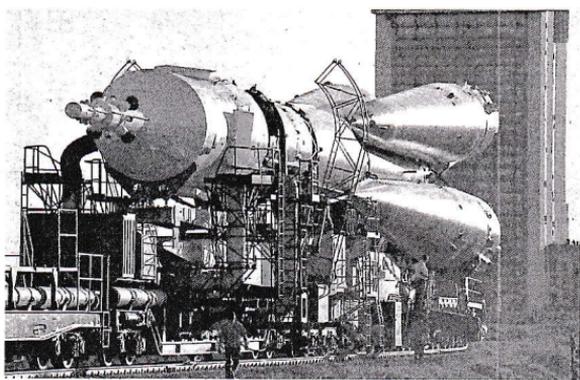
時が反転したような不思議な思いにとらわれた。隣接する農地には牧草のロールが転がり、時折、牛の声も聞こえてくる。標高1350m。天体からの微弱な電波をとらえるのに適したのどかな高原地帯に、この由緒正しき宇宙研究の拠点はある。

科学運用を終えたミリ波干渉計が、運搬用のさびた線路の近くに並んで天を仰いでいる。チリのアルマ望遠鏡の礎とも

なった観測機器である。直径45mの電波望遠鏡の方は今も現役だが、こちらも「完成年月1981年12月」と記された銘板と土台部分のさび付きが、風雪に耐えた長い時の経過を物語っていた。

往時の輝きは失ったとはいえ、今年「野辺山」が再び脚光を浴びた1年だった。ノーベル物理学賞を受賞した欧米3氏によるブラックホールの研究。野辺山の巨大な電波望遠鏡は、栄冠をつかんだ研究に先立ち、それとは別の手法で、ブラックホールの存在を裏づけたレジエンドなのである。

天文学者の海部宣男さん（昨年没）が中心となって建設。そ



れを関西学院大の中井直正教授を中心とした研究チームが存分に活用し、大発見につなげた。ブラックホールの研究にもたらされた栄誉は、野辺山を舞台にした日本の優れた研究の延長線上にある。

さび付いた線路から思い出す光景がある。かつて中央アジア

の半砂漠地帯で、ロシアのロケット打ち上げを取材した時のこと。野辺山と同じようなパラボラアンテナが居並ぶ広大な宇宙基地で、優美なフォルムのソーズを打ち上げ場まで運んだのもまた鉄路だった。

人類初の宇宙飛行を成し遂げたガガーリンも飛び立った発射台へと続く鉄路は、孤独な少年ジヨバンニが親友のカムパネルラとともに旅する銀河鉄道の物語を思い起こさせた。宇宙の壮大な謎に挑む科学の営みが、世界の研究者たちがバトンをつなぐ果てしない旅だとすれば、その鉄路の始まりは鉄路こそがふさわしい。

科学の発見は、先人の優れた発見を踏まえて初めて成し遂げることができる。「巨人の肩の上に立つ」という科学の金言をかみしめている。